<会員のひろば>

私たちのめざすヘルパーとは？

北　村　敬　子（大阪府／大阪総合福祉専門学校生）

大阪府堺市にある大阪総合福祉専門学校で学ぶ学生です。もっとも学生といっても、当方、40ウン歳になるおばさんですが、２年間の課程を終えると、高齢化社会になくてはならないと大きな期待を寄せられている介護福祉士（ケアワーカー）の免許を取得することになります。

私たちの学校は、大阪で働く福祉関係の人たちの力でつくられました。ここで学んでいるのは、３分の２が19歳から20歳の青年たちです。私たちのような社会経験を持つ人たちは８人。うち、40歳以上が６人です。２年間の学びをほんとうに生かせるような仕事がしたい、長年培ってきた家庭や職場での経験や力を生かしたいという希望をもっている私たちがこれだと思ったのが、神戸などで実践されている中高年事業団のヘルプ活動でした。そして、まず『協同について学び合う会』を結成し、「協同について」の学習会を開催しました。また、東京に菅野正純氏をたずね、高齢者生協のお話を聞き、この協同総合研究所へ入会することになりました。

１月には神戸の事業団を訪問し、３月の春休みを利用して、現場実習、見学をお願いすることができました。若い人たちの間でも関心が強く、ぜひヘルプに参加したいと、11名が実習に参加することになりました。

また、現在、大阪西淀川にある事業団とは、病院で行なっている訪問看護と合わせてのホームヘルプ活動をやっていけないかという話し合いも進行中です。

この１年間学ぶ中で、私は障害者はもちろんのこと、人間は死ぬまで発達し成長するものであり、その発達をどう保障していくのかということを考えた場合、さまざまな社会資源の充実はもちろん重要ですが、一人一人が自立すること、学ぶことがいかに重要かということを知りました。

老人になったから、援助してもらうのが当たり前とか、反対に、やってもらってるということばかり思って卑屈になったりすることがあります。そうではないのです。だれもがその時その時を人間らしく生きるということがだいじなのです。私たちは、ヘルパーとして、一方的に援助するのではなくて、同じ人間として、いっしょに生きていくことがだいじだと思っています。いっしょに生きていくという場合は、どちらもが人間として自立していなければなりません。それは、老人になってからのことではなくて、幼いときから、そして青年となり大人になって歳を経ていく間も、一人一人が自立してこそ、対等な立場で助けたり助けられたりすることができるのだと思うのです。だからこそ、相手を大切に思う心、一人一人がかけがえのない存在だと思える気持ちが出てくるのだと思います。

互いに助け助けられている、人間の社会とはそうあるべきなのです。そうなれば、だれももう、福祉のお恵みだとか甘やかしだといえなくなるでしょう。

助け助けられる〝協同の思想〟こそ、これからの高齢社会の在り方を考えるうえで、たいへん重要だと思います。

これから、高齢者生協についての学習を深め、私たちなりのイメージづくりをしていくためにも、どんどん外に出て、学習と実践を積み重ねていきたいと考えています。研究所や会員の方々のご指導をよろしくお願いします。